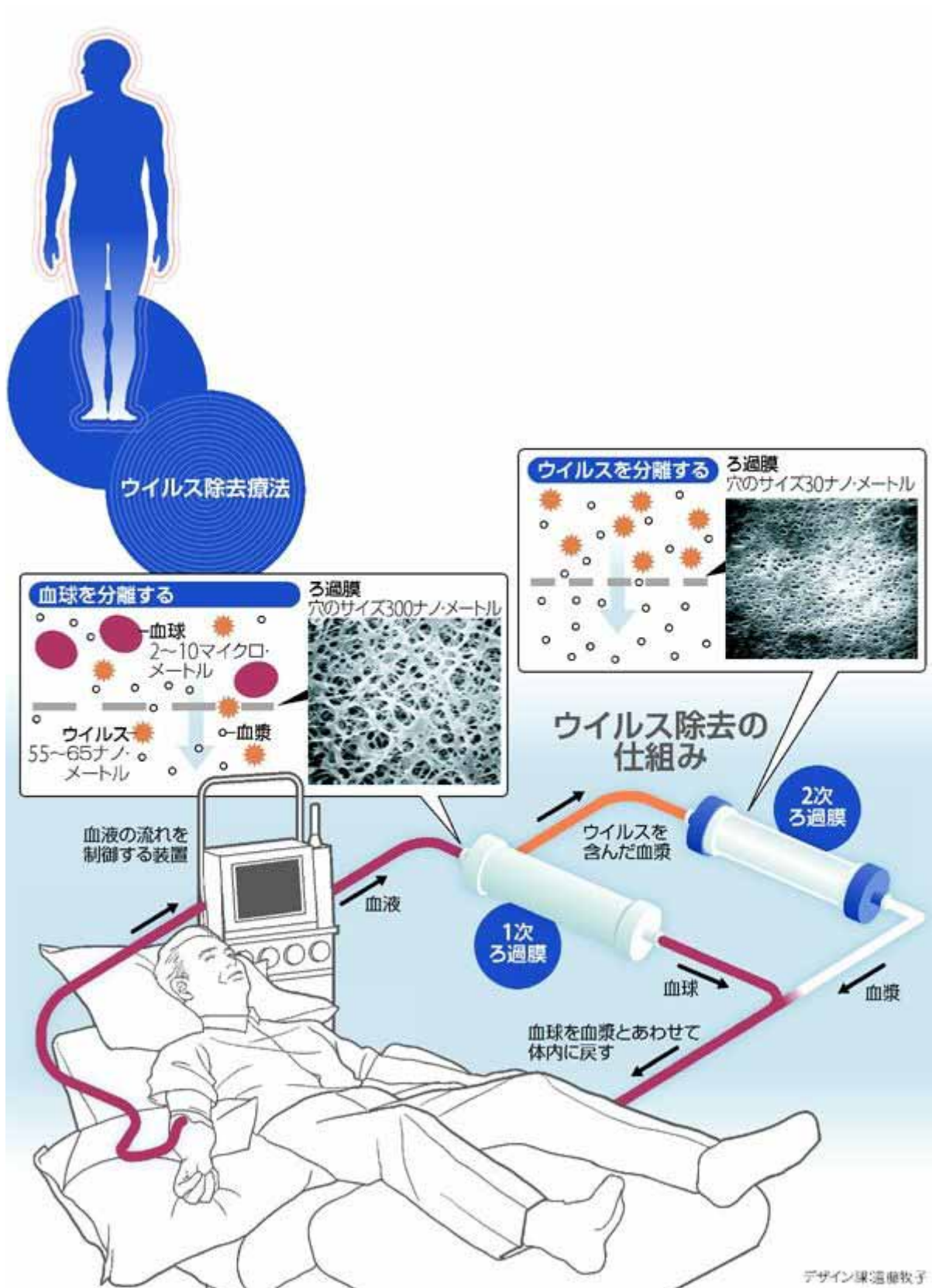


C型肝炎新療法

2段階でウイルス分離

C型肝炎の新しい治療法「ウイルス除去療法」に4月から保険が使えるようになった。血液を静脈から一時的に体外にポンプで吸い出し、特殊なる過膜でウイルスをこし取る仕組み。従来からのインターフェロンの注射と併用することで、治療効果が向上するという。(山崎光祥)



福岡市の男性（47）は数年前、体のだるさを感じるようになった。しばらくすると寝込むことも増え、仕事も手につかなくなったため、市内の診療

所を受診した。診断は、C型肝炎ウイルスの感染による慢性肝炎。しかも、治りにくいタイプとされる「1b」型のウイルスが計測できないほど多かった。

炎症を抑える薬を服用し、少しは症状が改善したが、感染すると大半は肝硬変、肝がんへと悪化していく。1b型でしかもウイルス量が多い患者を対象とするウイルス除去療法の臨床研究が行われていたため、2005年12月に久留米大消化器内科で受けることにした。

治療では、直径55～65ナノ・メートル（ナノは10億分の1）のウイルスを2段階で除去する。最初に300ナノ・メートルの穴が無数に開いたろ過膜で、大きな赤血球などの血球成分と、ずっと小さいウイルスと血漿（けっしょう）に分離。次に穴が30ナノ・メートルのろ過膜でウイルスを取り除き、血漿だけを血球成分と一緒に体内に戻す。

インターフェロンは週1回、1年間続け、最初の2週間のうちに1回2～6時間のウイルス除去を最大5回行う。

治療中、男性には体を長時間動かさない苦痛や、ひどい吐き気があり、2週間目に入るとつらさがさらに増したという。発熱や全身のかゆみなどインターフェロンにつきものの副作用もあったが、1年後には血液からウイルスが完全に消えていた。

臨床研究には15施設が参加。インターフェロン注射単独では58人中、ウイルスが完全に消滅したのは29人（50%）だったのに対し、除去療法も併用した24人では17人（70・8%）に効果があった。

男性の治療を担当した久留米大講師の井出達也さんは「肝臓で無限に増殖するウイルスを、いち早く血中から排除できるため、注射が効きやすくなる。日本人感染者の6割は1b型とされ、治療の対象となる患者は多い」として

いる。今年4月からは治療費の自己負担を所得に応じて月1万、3万、5万円に軽減する助成制度も始まった。

男性は「1年半たった今は、たまにだるさが出る程度で体はずいぶん軽くなり、普通に仕事もできるようになった。たとえ副作用はつらくても耐える価値は十分にあった」と喜んでいた。

ウイルス除去療法を行っている主な医療機関	
北海道大	(電) 011・716・1161
埼玉医科大(埼玉県毛呂山町)	(電) 049・276・2107
昭和大(東京都品川区)	(電) 03・3784・8000
日大板橋(東京都板橋区)	(電) 03・3972・8111
金沢大	(電) 076・265・2000
岐阜大	(電) 058・230・6000
岐阜市民	(電) 058・251・1101
久留米大(福岡県久留米市)	(電) 0942・35・3311
佐賀大	(電) 0952・31・6511
長崎大	(電) 095・819・7200

(2008年6月13日読売新聞)